OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	世阿弥の能と能楽論の研究 : その編年的位置づけをめざして
Author(s)	尾本, 頼彦
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44751
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	尾本頼彦（おもとよりひこ）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 18323 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	世阿弥の能と能楽論の研究－その編年的位置づけをめざして－
論文審査委員	（主査） 教授 天野 文雄 （副査） 助教授 永田 靖　大阪大学総合学術博物館教授 肥塚 隆

論文内容の要旨

本論文は世阿弥の能と能楽論が、いつどのような順序のもとに制作あるいは執筆されたのかという問題を解明しようとしたものである。全体は2編からなっていて、第1編「世阿弥の能楽論の編年的研究」では、第1章「「奥義」と「別紙口伝」－その先後関係と世阿弥能楽論の展開－」、第2章「「花修」と「別紙　口伝」－その先後関係と世阿弥能楽論の展開－」、第3章「「奥義」と「花修」－その先後関係と「奥義」の増補－」、第4章「『花伝』物学条々の「舞がかり」－増補との関連とそれが意味するもの－」、第5章「『花伝』「問答条々」第9条の増補再検－「花の論」の質をめぐって－」、第6章「「初期花伝」の増補と「花修」－「問答条々」第9条の増補時期をめぐって－」、第7章「『花伝』「奥義」再検－「奥義」の成立をめぐる諸問題－」、第8章「〈天女舞〉の大和猿楽への導入時期－『花伝』・「舞がかり」・導入の足かせをめぐって－」の8章にわたって、主として世阿弥の最初の能楽論である『風姿花伝』7編の成立順と世阿弥自身による『風姿花伝』にたいする改訂増補の実態の究明がなされている。また、第2編「世阿弥の能の編年的研究」では、第1章「能のクセ詞章の性格とその変遷－世阿弥の能の編年的位置づけのために－」、第2章「《実盛》と《敦盛》の作劇法－世阿弥の軍体能の編年的位置づけ－」、第3章「《通盛》の世阿弥軍体能における位置づけ－《通盛》と《実盛》の先後関係－」、第4章「《頼政》の世阿弥軍体能における位置づけ－《実盛》《頼政》《清経》の先後関係－」、第5章「《清経》の世阿弥軍体能における位置づけ－《清経》と《敦盛》の先後関係－」、第6章「《忠盛》の世阿弥軍体能における位置づけ－《敦盛》と《忠盛》の先後関係－」、第7章「世阿弥の女体神能－《箱崎》《鵜羽》《布留》《呉服》の位置づけ－」、第8章「世阿弥の女体神能－《箱崎》《鵜羽》の後ジテの持物をめぐって－」、第9章「世阿弥の男体神能－《弓八幡》《老松》の位置づけをめぐって－」、第10章「世阿弥の老体能の後ジテの老若再検」、第11章「応永末年ころの能の編年的位置づけ－「歌舞」「舞歌」の語をめぐって－」の11章にわたって多くの世阿弥作の能の先後関係が論じられている。その結果、第1編では、『風姿花伝』については7編の執筆時期が現在の巻序順であろうこと、世阿弥による増補がこれまでに指摘されている以上に多いこと、その増補の時期も応永15年代後半ころと応永20年代後半の2つの時期が想定され、その大半は応永10年代後半ころの増補であろうことなどが指摘されている。また、第2編では、世阿弥の軍体能（武士の亡霊を主人公とした能）においては、その制作順は、《通盛》→《実盛》→《頼政》→《清経》→《敦盛》→《忠度》であり、脇能（神を主人公とした祝言能）においては、その制作順は、《養老》→《箱崎》→《鵜羽》→《難波梅》→《弓八幡》→《老松》→《高砂》であったろうと結論づけている。また、世阿弥の能楽論における用

語である「歌舞」は応永 27 年ころを境に「舞歌」と変わっているが、その「歌舞」と「舞歌」が世阿弥や世阿弥周辺の作者の作品に用いられている点に着目して、「歌舞」の語を持つ《逢坂》《仏原》は応永 27 年 6 月以前の制作であり、「舞歌」の語を持つ《白楽天》《蟻通》《志賀》《山姥》《采女》《吉野西行》《源大夫》《賀茂物狂》は応永 27 年 6 月以後の制作であろうとし、これまで漠然としていたこれら 11 曲の成立時期に確実な指標を提示してもいる。なお、本論文は 400 字詰原稿用紙に換算して約 1200 枚ほどの論文である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、世阿弥の最初の能楽論である『風姿花伝』の複雑な形成過程や、現存する世阿弥の能がどのような順序で制作されたかについて考究したもので、芸論と作品の２つの面からなされた世阿弥研究でもある。全体が７編からなる『風姿花伝』は最初からそのような形で成立したものではなく、まず最初の３編「年来稽古条々」「物学条々」「問答条々」からなる「初期花伝」が応永７年に成立し、その後、応永 10 年代の末ころまでに、執筆順は不明ながら、第４編「神儀」、第５編「奥義」、第６編「花修」、第７編「別紙口伝」が執筆され、そのうち第１編から第５編までが応永 20 年代後半ころに世阿弥自身によって改訂増補されてまとめられ（「５巻本」と呼ばれる）、それ以前は『花伝』という書名だったものが、そのおりに『風姿花伝』と改められたというのが、比較的近年に提起されて定説となっている『風姿花伝』の形成過程である。本論文では、このような研究状況をうけて、これまで想定されていた「初期花伝」後の「別紙口伝」→「奥義」→「花修」という成立順が現在の巻序どおりであろうことや、世阿弥による指摘箇所を新たに指摘し、その増補の時期についても、用語をてがかりに応永 20 年代後半における増補はさほど大幅なものではなく、応永 10 年代後半ころに大幅な増補がなされたものとしている。本論文の主張は仮説的な要素も多く、その主張には今後の検証が必要な所説も多いが、世阿弥能楽論研究のなかでもとりわけ精密になっている『風姿花伝』研究について、各編の成立順や増補の時期や規模をめぐって、独自の体系的な成立論を提示したことは高く評価されるべきであろう。また、第２編で論じられている、世阿弥の能の成立時期については、たとえば応永 30 年以前とか応永 30 年以後というていどのめやすしかなく、それ以上の限定は作品相互の比較分析という方法によるしかないとされていたのであるが、本論文ではその作品分析という方法をもって、あえてその困難な課題に取り組み、上述のような結論を導きだしている。この第２編では、どちらかといえば、世阿弥の能の編年的位置づけを直接試みた第２章から第９章までの論より、「歌舞」「舞歌」という語をもとに世阿弥や世阿弥周辺の能の成立時期を限定した第 11 章の論や、現在は若い神で登場する《高砂》や《養老》が本来は老体であったことを論じた第 10 章のほうが、成果としては意義の高いものになっている。それにたいして、眼目である第２章～第９章の論はその作品分析が申請者独自の方法がうち立てられるにはいたっていず、その分、なお十分な説得力をもつにはいたっていないが、細部には重要な指摘も少なくない。ともあれ、以上のような第１編と第２編の成果によって、本論文が提示した世阿弥の能の編年的な位置づけは、この方面の研究の進展に寄与することは疑いがない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。